０５０４３０７９　西洋言語文学研究科　修士１年　桃井富範

映画「カラマーゾフの兄弟」を見て

映画「カラマーゾフの兄弟」は、1968 年ソ連で公開された作品である。

ドストエフスキー文学の集大成といわれる傑作を旧ソ連映画が総力をあげて映画化した文芸大作。イワン・ブィリエフ監督（１９０１－１９６８）は１９３０年代から 40 年代末まで,「サーカス」や「シベリヤ物語」などミュージカル映画のヒット作を連発,50 年代から長年傾倒してきたドストエフスキー文学の映画化へ。「白痴」（５８）「白夜」（５９）に続き,この「カラマーゾフの兄弟」（６８）3 部作に取り組む。人間の神性と獣性の衝突,肉親同士の激しい葛藤を第一線演技陣を動員,本場者ならではの重厚かつ緊迫した心理ドラマを見事に映画化。完成間際に監督は急死,主演のウリヤーノフ,ラヴロフがその志を継いで完成してロシア文芸映画の記念碑的大作となる。（解説より）

つまりはこの作品はドストエフスキーが過去に小説として発表した物語を映画化したものであるといえる。

物語に登場するのは男の主人公は主にカラマーゾフ家の 3 人の兄弟、ドミートリー、イワン、アリョーシャと、その父親であるフョードル・カラマーゾフであり,ヒロインとして登場するのは、娼婦であるグルーシェンカと、貴族であるカテリーナである。

この物語は主題が複数からみあっており,作品のテーマはこうですと簡単に決めることは不可能ではあるが,父親殺しという大きな主題を念頭においた上で,上にあげた主人公たち一人一人を中心としてあらすじを語っていくことにしよう。

第一にドミートリーであるが,彼を主人公だとすると、この物語は「好色者であるドミートリーが貴族のカテリーナを捨てて、娼婦のグルーシェンカを父であるフョードルと奪い合い,父親殺しの嫌疑で逮捕されるが,最期には信仰に至る」という話である。

イワンについては、「貴族であるカテリーナを愛し,神の世界についての思索的な戦いに没頭し,ついには譫妄症にかかってしまう」という話である。

アリョーシャについては「好色で問題的な二人の兄と父との間に立ちながら、宗教的な問題に苦しむ主人公」の話だといえるだろう。

フョードル・カラマーゾフについて言うならば,「娼婦であるグルーシェンカに惚れ込み,息子であるドミートリーと骨肉の戦いを繰り広げ,最後には召使であるスメルジャコフに殺されてしまう」という話だということが出来る。

さてヒロインのほうに移ってみよう。

グルーシェンカを中心としてみるならば,「カラマーゾフ家の父親と長男の争いの原因となる

が,最後にはドミートリーと結ばれる女性」としてみることが出来る。

カテリーナ・イワーノブナは、「イワンのことを愛していながら,ドミートリーからひどい屈辱を受け,その復讐としてドミートリーと結婚しようとする」女性の物語だとも言える。

以上のように、ドストエフスキーの作品における人物配置や描写の中で、特定的な主人公を設定することは大変難しい問題であり、ミハイル・バフチンのポリフォニー論などで現在それは非常によく知れ渡っているわけだが,「カラマーゾフの兄弟」という作品の中で、もっともプロットの進行と密接に関わっているのは、やはり主人公のドミートリーだということが出来る。

ちなみに先ほども述べた通り,この作品は小説～映画という進行パターンをとっているわけだが,この作品は特にパロディーや現代化などの手法は一切とらず,どちらかというならばより忠実な映画化を再現しようとしている。

この映画の特徴を一言でいってみると,ドストエフスキーの小説でも同様のことではあるが,まず第一に屋外での描写は例外的なもので,一般に屋内での場面がほとんどを占め,作中の登場人物たちの会話がその大半を占めるものである。

また、カメラの移動や展開・ズームなども行われているが,カメラの視点は,一言で言うならばたまたまその場に居合わせた一人の傍観者のようである。

登場人物たちの感情の動きを主に表すのは時々流れるクラシック調の BGM である。

などといろいろ語ってはきたものの,桃井は文学を論ずるには多少の経験とアプローチの方法があるが、映画を論ずるのにはいささかの自信もないというのが本当のところだが、以下に感想めいたものを語っていきたい。

まず映画を見て率直に思ったのが,その抽象性と具体性である。ドストエフスキーの小説内では、作者によって主人公の容貌や行動などが語られるが,その読者は少ない言語的な情報から具体的な姿や動きを想像せざるを得ない。しかし,そこにこそ小説的な面白さがあり,読者はその登場人物たちに自分やあるいは自分に身近な人物たちを重ねあわせ,自己を投入していく。簡単に言い換えれば,言語による表現は、その視覚的な要素が各読者達に委ねられているのである。

一方で今回の映画はその逆を行く。今まで自身の想像の中で形作られていた主人公像が、きっぱりと打ち破られ,生々しい人間の姿で描かれ,具体的に目から脳に取り込まれていく。そこには自己の感情移入の余地は非常に少なく,それを見るものは非常に客観的にのみ作品内で起こるドラマを楽しむことが出来るのである。

結論　カラマーゾフの兄弟

客観性、具体性　映画＞小説

感情移入度、創造性　小説＞映画　　ということにでもなるのだろうか。